Ⅱ　キリスト教思想史の諸問題

＜前回＞ 知恵と終末

１．宗教的人間観：人間を救済との関係で見る。
　救済の可能性（創造）、救済の必要性（堕罪）、救済の現実性（神の国と終末）
２．イエスの福音／イエスの活動（教え・論争・癒し）、「神の国」というキーワード
　「時は満ち、神の国は近付いた。悔い改めて福音を信じなさい」（マルコ 1:15）
３．神の秩序←→この世の秩序（古い秩序）＝罪（ハマルティア）
　　階層性・二分法・対立　　的はずれ（Sin）　　cf:　規則の侵害（sins）
　　関係の歪み（神関係、自己関係、他者関係）
４．神の秩序の実現＝古い秩序の転換＝罪の解決＝救済　→　福音
５．終末：生と死の最終的決着の時，罪の問題の最終的解決
　　→神との完全な関係の実現・本来的な人間性、正義の実現
６．伝統的な終末論の類型：預言者的、黙示的　→　イエスの神の国：意味の拡張・転換
　　義人の救い・ユダヤ民族の救い　　罪人・万人の救い
７．キリスト教へのユダヤ教の終末論類型の影響
　ダビデの子孫としてのイエス、人の子イエス
８．知恵の教師イエス
　　慣習的知恵（既存の秩序を肯定）、転換的知恵（既存の秩序の転換・批判）
９．知恵から終末論へ：人間性の回復される現実をもたらす知恵

第２講：古代キリスト教

１　ヘレニズム世界のキリスト教―「無からの創造」論―

（１）キリスト教思想のダイナミズム

理念（神の国の徹底的な平等主義・絶対平和思想）と現実（制度化）との緊張

イエスの死後、イエスの宗教運動は、運動体という流動的な形態から、しだいに「制度化した宗教」（狭義の宗教）へと移行してゆく――キリスト教はこの移行の決定的な契機として、イエスの復活と聖霊降臨（ペンテコステ）の出来事をあげている――。こうした変化は、教祖と弟子たちを核とした運動体が歴史的状況の中で生き残るだけの耐久力を獲得するのに不可欠のものであって、いわば宗教にとっての運命的な制約とも言える。しかし、制度化は共同体外部の世俗世界との妥協を通して獲得されるものであって、宗教運動が目指してきた理想・理念（「神の国」）の後退を伴わざるを得ない。ここに生じるのが、理念と現実との緊張であり、この両極の間で、キリスト教の歴史は揺れ動くことになる。歴史的プロセス内部において、主潮流は基本的に制度化の内に認められるのであって、理念への回帰は、傍流あるいは反動という形態（しばしば異端とい

う形で現れる）をとる。確かに制度化は不可避であるが、しかし、キリスト教が自らの原点・正統性の根拠を新約聖書に表現されたイエスの宗教に求める限り、イエスの宗教運動の理念（たとえば、以下に引用の聖書を参照）を放棄することはできない。

＜マタイ５＞

38「あなたがたも聞いているとおり、『目には目を、歯には歯を』と命じられている。39 しかし、わたしは言っておく。悪人に手向かってはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい。40　あなたを訴えて下着を取ろうとする者には、上着をも取らせなさい。41　だれかが、一ミリオン行くように強いるなら、一緒に二ミリオン行きなさい。42　求める者には与えなさい。あなたから借りようとする者に、背を向けてはならない。」43　「あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。44　しかし、わたしは言っておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。45　あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。46　自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあろうか。徴税人でも、同じことをしているではないか。47　自分の兄弟にだけ挨拶したところで、どんな優れたことをしたことになろうか。異邦人でさえ、同じことをしているではないか。48　だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」

（２）原始キリスト教会と愛の共産主義

最初期のキリスト教において、キリスト教の理念が歴史的現実に作用した実例として、使徒言行録が報告する「愛の共産主義」を指摘することができる。もちろん、聖書学的に言えば、ここで報告されている「愛の共産主義」が歴史的事実として確認できるかについては、多くの疑問が投げかけられている。しかし、初期のキリスト教共同体が、財産共有という理念を自らの理想として描いたことは疑い得ない事実である。

１．愛の宗教とその現実化 → 分かち合いの共同体の形成＝愛の共産主義
「山上の説教」（マタイ５～７章）の理念

２．**＜使徒言行論４＞**

32　信じた者の群れは、心を一つにし思いを一つにして、だれひとりその持ち物を自分のものだと主張する者がなく、いっさいの物を共有にしていた。33　使徒たちは主イエスの復活について、非常に力強くあかしをした。そして大きなめぐみが、彼ら一同に注がれた。34 彼らの中に乏しい者は、ひとりもいなかった。地所や家屋を持っている人たちは、それを売り、売った物の代金をもってきて、35　使徒たちの足もとに置いた。そしてそれぞれの必要に応じて、だれにでも分け与えられた。

Ｑ：なぜ、「貧しい者は幸いである」（ルカ 6.20）のか？

３．社会主義の二つの形態
1)マルクス主義　　2)キリスト教社会主義運動

（３）無からの創造

＜創世記＞

1:1 初めに、神は天地を創造された。2 地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。3 神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。4 神は光を見て、良しとされた。神は光と闇を分け、5 光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第一の日である。

パウロなどの伝道者の活躍によって、１世紀の原始キリスト教は、地中海世界の都市から都市へと急速に広まってゆく。キリスト教の制度化は、ヘレニズム的文化世界の中で進展したことによって、キリスト教はヘレニズム世界の影響を強く受けることになる――このヘレニズム世界の影響（ヘレニズム化）はキリスト教に先行したユダヤ教においてすでに開始されていた――。その影響は、思想的側面においても明確に確認できる。ここでは、「無からの創造」の教説を取り上げ、その意義を自然科学の営みとの関係で論じてみたい。

４．創造物語（第一）から無からの創造へ

上に引用した創世記の第一章の創造物語については、これまでも説明を行ってきたが、改めてその冒頭を見るならば、そこに、神の天地創造においてすでに、「混沌」「闇」「深淵」「水」といったものが存在していることがわかる。これについては、前期講義で見た、古代バビロニア神話（英雄神とドラゴンとの対決）など、古代イスラエルに先行する太古の神話の影響が指摘されており、神とこの混沌（カオス）との関係は明確に語られないままに止まっている。この関係は、ユダヤ教がヘレニズム世界との関わりを深める中で次第に問題化することになる。古代キリスト教において定式化された「無からの創造」の教説――神は他の何者にもまったく依存することなく単独で万物を創造した。「ヘルマスの牧者」の「第一のいましめ」によれば、「一切を有らざるものから有るものへと造りたもうた」――は、こうした思想史的文脈における問題の展開に対して、キリスト教が自らの立場を表明したものと考えられる。

５．ヘレニズム世界への展開　→　ヘレニズム文化との交渉・論争

論争の場としてのコスモロジー

「悪の原因」という問題は、古代世界の諸宗教・諸思想の共通の問題であって、諸宗教・諸思想はコスモロジーという枠組みにおいて、神話によって、あるいは理論において、自説を展開していた。悪の原因についての有力な説として、善悪二元論（あるいは善なる神と悪なる神との二神論）や物質＝悪論が存在しており、キリスト教は、創造の善性という立場から、創造物語に基づいて、これらを論駁することを試みることになる。

６．プラトンの世界創世論（『ティマイオス』）

プラトンによれば、世界は、デミウルゴス、イデア界、素材、善という４つの原因によって創世された。すなわち、制作者であるデミウルゴス（神々の父、作用因）は、世界のモデル（パラデイグマ、設計図、形相因）としてのイデア界を観照しつつ、素材・場（物質、質料因）において、善（目的因）を目的として、この世界を創造した。

この神話的物語は、旧約聖書の創造物語と類似点を有しており、古代のユダヤ教思想家（フィロン）やキリスト教思想家（教父）らを引きつけた――なお、ここでの「ティマイオス」の説明は、「無からの創造」説を論じるという目的で行われており、厳密な解釈を示すことは意図していない(作用因などのアリストテレス的な用語を混在させた)――。

７．神・創造の善性と神の絶対性の強調：救済の確実性

合理的原理：デミウルゴス、イデア、善
非合理的原理：物質（場）

キリスト教の「無からの創造」説は、次の点で、ティマイオスの世界創世神話との差異化を試みている。つまり、「無からの創造」によって解される旧約聖書の創造神は、デミウルゴスとは違い、場・物質といった非合理的な原理に依存せず、独力で世界を善なるものとして創造した（何にも依存しない→無からの)。したがって、世界には、神の善性・合理性を妨げるもの（悪神であろうと、物質であろうと）は存在しない、神のみが世界を支配するということが、帰結することになる。こうした神の絶対性の強調は、人間の救済の確実性という論点に関わっている。

８．「無からの創造」(creatio ex nihilo)の帰結

「無からの創造」説からは、さらに次の帰結が生じる。

(1)悪の問題のアポリア

旧約聖書の創造物語において主張される創造の善性は、悪の問題を理解する上で難点を有していた。「無からの創造」説は、この悪のアポリアをさらに増幅することになる。これに対して、様々な神義論が試みられた。実際、悪の問題・神義論は、神の存在論証と同一の論理性を有している（ヒック、プランティンガ)。

(2)世界の合理的秩序とその理解可能性

「無からの創造」説は、神的合理性（法則、秩序、理解可能性）が世界の隅々まで浸透していることを含意している。そして、この世界の合理性は人間理性によって理解可能である。なぜなら、世界のロゴスも人間のロゴスも、同じ神的ロゴスに依拠しているからである。これは、世界全体・現象世界を科学的に探究することの動機付けとなった。後に見るように、自然科学世界の内部にはみごとな秩序を発見することによって、神の驚くべき偉業を讃美するという点で、宗教的行為なのである。

＜参考文献＞

１．荒井　献　『原始キリスト教とグノーシス主義』岩波書店
２．コンツェルマン　『原始キリスト教史』日本基督教団出版局
３．佐竹　明　『使徒パウロ――伝道にかけた生涯』ＮＨＫブックス
４．ハルナック　『キリスト教の本質』岩波文庫
５．プラトン　『ティマイオス』（種山恭子訳『プラトン全集』12巻）岩波書店
６．平石善司　『フィロン研究』創文社

７．有賀鐵太郎『キリスト教における存在論の問題』(『著作集４』) 創文社
８．山田　晶　『在りて在る者』創文社
９．芦名定道　『自然神学再考――近代世界とキリスト教』晃洋書房
10. 湯浅泰雄　『ユングとキリスト教』人文書院
11. 伊東俊太郎『近代科学の源流』中央公論社